

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2019-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 達馬 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44537

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

「人間関係論」担当 中尾達馬（教育学部）

このたび、本賞をいただきましたことを、受講生のみなさん、大学関係者各位に深く感謝いたします。

私の授業は、非常にオーソドックスな講義形式の授業で、教科書は指定されていて、第1回目のオリエンテーションからはじまり、第16回目に学期末試験（持ち込み不可）を行います。受講者数は100名程度で、学期末試験の平均点は、100点満点換算で平均65.7点です（Table 1）。以下、本科目の概要および私が授業時に行っている工夫（あるいは心がけていること）について記します。

Table 1 実施年度ごとの受講者数および学期末試験の平均点（100点満点）

年度	H23	H24	H25	H27	H28	H29	平均
受講者数	70	123	88	103	108	127	103.17
学期末試験	61.63	68.81	59.88	66.38	67.41	70.13	65.71
開講	昼	昼	夜	昼	昼	昼	—

注) H26年度は、育児休暇中であったため開講していない。

「人間関係論」という科目

本授業は、心理学に関する概論の授業の一つで、「心の科学」と「人間関係論」の2つで、心理学全般をかなり広範囲にわたって知ることができます。廣瀬等教授（教育学部）に伺ったところによると、もともとは、これらの授業は『初めて学ぶ心理学』（名城・東江，1986）に基づき行われており、「心の科学」では第1章から第7章の内容について、「人間関係論」では第8章から第16章の内容について、授業が行われていたそうです（Table 2）。

工夫例1：受講契約

私が授業を行う上で、一番参考にした資料（文献）は、澤田（2009）です。特に、以下の部分を読んだときには、「なるほど！」と雷に打たれたような衝撃を受けました。

…たとえば、授業のガイダンスで学生と受講契約を結ぶというのは、松井豊先生（筑波大学）から拝借したものである。受講契約と入っても、授業中守るべき最低限の要件を説明するだけであり、少し大げさな表現かもしれない。しかし、約束事を最初に結んでおくことは、今後の授業運営において重要な役割を担っているように思われる。

私は、授業契約の項目の中に「私語の禁止」といった当たり前のことから、「睡眠・内職は可」といった一風変わったものまで盛り込んでいる。さらに、「出席は取らな

いので、来たくないなら来なくてもいい」とさえ言い放つ。それには理由がある。契約というのは、一方的なものではなく、教員と学生がお互いに守るべきものを明確にしてこそ契約たり得ると考えている。だから、居眠りを許すというのは、裏を返せば「つまらない授業はしない」という、教える側の決意表明でもあるのだ。

澤田 (2009, p. 15)

そこで私も、第1回目の授業（オリエンテーション）では、学生と Figure 1 のような受講契約を交わすことにしています。もちろん、第1回目の授業では、シラバスに基づき「授業内容と方法」「達成目標」「評価基準と評価方法」について説明をします。特に、「評価基準と評価方法」については、学期末試験の出題形式や内容および採点方法について、かなり具体的に話をします。私は、このような授業契約は、本講義が受講者と実施者双方の契約に基づいて、お互い納得の上で展開していくということを確認するために、必要な作業だと思います。

Table 2 「心の科学」「人間関係論」と『初めて学ぶ心理学』（名城・東江，1986）の対応関係

心の科学		人間関係論		
心は環境にどのように働きかけているのか知っていますか	心の知的な働きについていえますか	子どもや青年の考え方や気持ちを理解できますか	自分自身や他人を本当に理解していると思いますか。不安な状態に陥ったことはありませんか	人間は社会的動物だということばを信じますか
第1章 外界をとらえる	第5章 記憶することと忘れること	第8章 精神の成長とは	第11章 パーソナリティを理解する	第14章 社会の子としての人間
第2章 学習と適応	第6章 考える葦	第9章 子どもの世界を知る	第12章 心の病気を正しくとらえる	第15章 人を説き自己を変えPRする
第3章 何が人をそうさせたか	第7章 知能と創造	第10章 青年の樹の下で	第13章 男と女の間で	第16章 職場という迷路で人を管理する
第4章 喜怒哀楽の心理				

注) 「心の科学」では、主に、人を理解する上での基本となる「知情意」について学びます。「人間関係論」では、これらの基本を押さえた上で、より応用的・実践的な分野として、発達心理学、パーソナリティ心理学、臨床心理学、社会心理学について幅広く学びます。

受講契約

- 私語は禁止
- 授業は 15 回行う（16 回目が試験）
- 出席は毎回とる（1/3 以上欠席→×受験資格）
- つまり，5 回以上の欠席 = ×，4 回まで = ○
- 休憩は 45 分に一度（約 5 分）
- 感想を一言以上書く（何でも可）
- 睡眠・内職可

Figure 1 受講契約

工夫例 2：出席票

Figure 1 の受講契約に明記しているのですが、本講義では、Figure 2 の出席票を用いて、毎回、出席を取ります。そして、受講生には、この出席票に、感想を毎回一言以上書いて貰っています。感想を毎回一言以上書いて貰うのは、授業が一方的にならないようにするためで、ここに記入して貰った感想や疑問は、次の授業の休憩の時に、紹介をします。感想は、「今日はいい天気ですね」「学食は何がお薦めですか」といったものから、受講者の近況報告（今度、ライブを見にどこどこへ行きます）、授業で分かりにくかった点、疑問点、日常的な質問、悩み相談など、バラエティに富んでいます。この感想紹介コーナーについては、受講者からは「ラジオみたいです」と評されることもあります。

式会社 IAC) で作成したマークシートです。このマークシートは、ソーター付きのスキヤナで読み取り可能で、これを用いることで、授業者の出欠確認が少しでも効率的になるようにしています。

工夫例 3：心理学を身近に感じて貰う

本授業の受講者は、「自分のことを知りたい」というニーズを持っている場合が多いです。そこで、可能な限り、授業内容と関連する心理テストを実施し、その結果を全体的にフィードバックするだけでなく、時々、希望者には、個別に結果をフィードバックします。たとえば、パーソナリティ心理学領域においては、代表的なパーソナリティ（性格）理論である類型論や特性論を紹介するだけでなく、実際に、Big 5 パーソナリティ検査を実施し、（この場合は）各自で自分の得点を算出してもらっただけでなく、同時に、血液型や生まれつき（あるいは星座）を記入して貰って、「血液型や星座は、パーソナリティと関連するのか」という結果を全体的にフィードバックしています。受講者には、自分たちを調査対象とした調査結果をフィードバックされることで、心理学的知識を少しでも身近なもの・自分に関連するものとして感じて貰いたいです。また、授業中にもできるだけ日常の具体例をあげ（たとえば、精神的健康は、身体的健康に似ていて、風邪を引いたときにいつ病院に行くのかは個人差があるように（つまり、早くから病院に行く人もいればそうでない人もいるように）、神経症やうつ病といった精神病理についても、いつ病院に行くのか（あるいは、いかないのか）には個人差があるが、いずれにせよ、精神的健康と身体的健康には似ている点がある。複数人でファミレスなどでお茶をしているときに、前の人と同じ注文をするか、など）、心理学的知識と日常生活を橋渡しするようにしています。さらに、実感を伴いながら授業内容の理解を深めるために、必要な時には、適宜、関連するビデオを見て貰っています（たとえば、乳幼児の発達の場合には、赤ちゃんに関するビデオを視聴します）。

工夫例 4：授業冒頭での復習

私が大学生の時に、丸野俊一教授（九州大学、当時）が「教授過程心理学」において、「小学校、中学校、高校、大学とあがるにつれて、前の回の授業との重なりが徐々に減っていくため（つまり、前回の復習を授業中にしなくなるため）、授業がどんどん難しく感じる」（Figure 3）という話をされていて、「なるほど」と妙に納得したことを覚えています。そのため、私は、毎回、授業の冒頭において、「前回の復習」というスライド（前回の授業で登場したキーワードの一覧が書かれているスライド）を1枚準備し、それを用いながら、前回の復習を簡単にして、今回の授業内容に入るようにしています。受講者からよく「心理学は言葉（専門用語）が難しい」という感想を貰うため、こうすることで、心理学をはじめて学ぶ受講者には、心理学の専門用語に対する嫌悪感や抵抗を少しでもなくしてほしい、と思います。

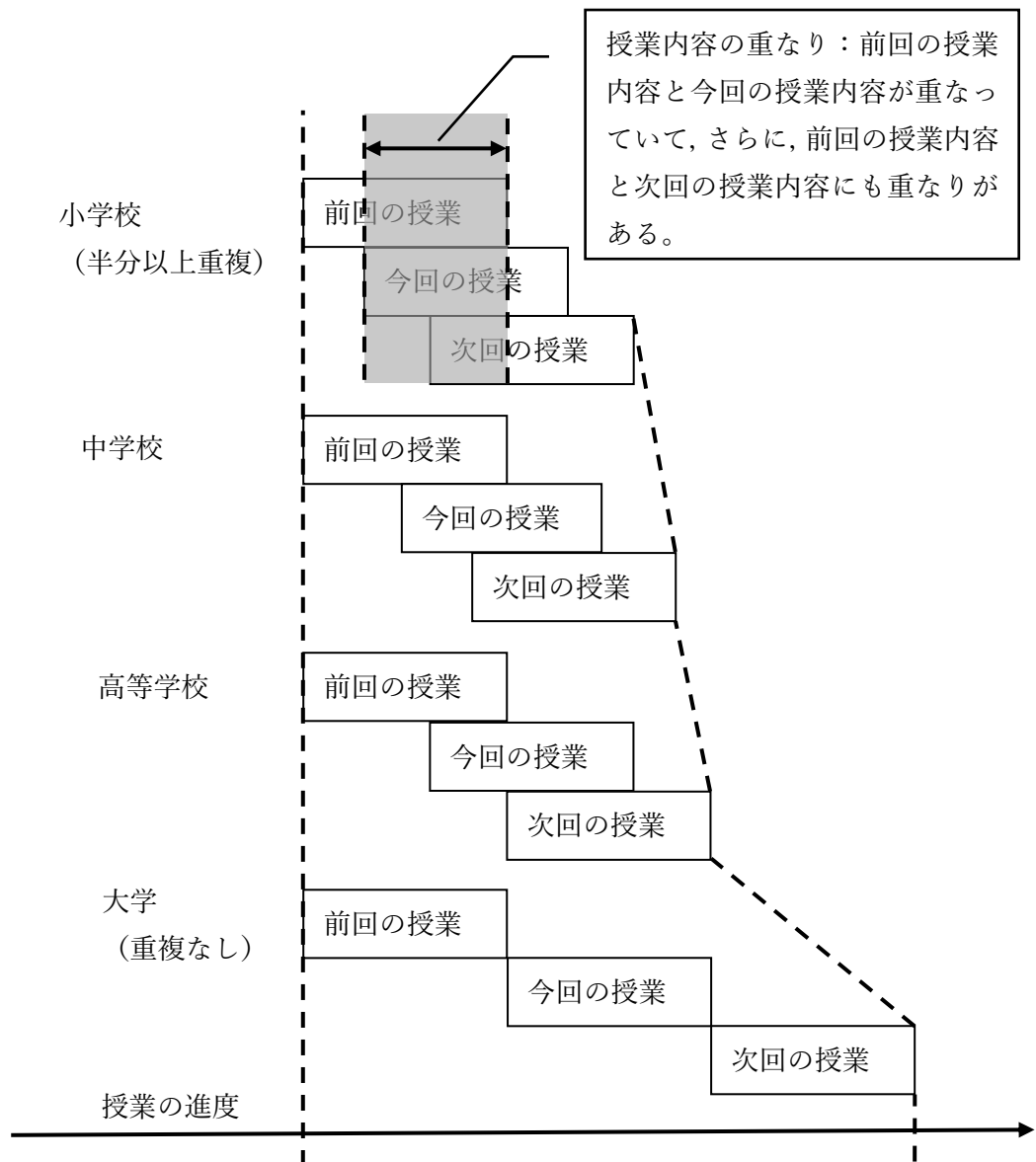


Figure 3 小学校・中学校・高等学校・大学における授業間の内容の重なり

注) 小・中・高・大と校種があがるほど、前回・今回・次回の授業内容の重複部分が減り、授業の進度が速くなる。

工夫例 5 : 1 ネタ 30 分

私が非常勤講師としてはじめて大学生の前で話したのは、27歳のときでした。このときに、先輩の吉村匠平先生（大分県立看護科学大学）に、「大学で授業をする際に気を付けていることは何ですか」と尋ねたことがあります。すると、吉村匠平先生は、「1コマ90分の授業でいくつのネタ（テーマ）を話すつもりですか。私は1ネタ30分で考えています」と教えてくださいました。この「1ネタ30分」という基準は、今でも私が授業をしたり、講演をしたりする際の目安になっています。

以上、とりとめもなく、授業で行っている工夫等を述べてきましたが、私の授業の核となる部分（授業に対する姿勢・進め方、板書の仕方、など）を鍛えていただいたのは、高等学校一種免許状（地理歴史）の免許を取得する際に教育実習で教えを受けた教科指導教諭の松田和子先生（佐賀県立鹿島高等学校教諭、当時）です。2週間という短い期間でしたが10回の授業を通して松田和子先生にお教えいただいた基礎・基本が、今でも私の大学での授業に対するベースとなっていることに感謝して、本稿を閉めたいと思います。

みなさま、どうもありがとうございました。

引用文献

名城嗣明・東江平之（1986）. 初めて学ぶ心理学 福村出版

澤田匡人（2009）私の「授業道」－心理学教育の改善－ 心理学ワールド, 44, 13-16.